



Title	海外報告(2) 国連軍縮ポスター・デザイン・コンクール授賞式に出席して
Author(s)	小川, 忠彦
Citation	デザイン理論. 1988, 27, p. 155-157
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/52672">https://doi.org/10.18910/52672</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

(海外報告)

## 国連軍縮ポスター・デザイン・コンクール 授賞式に出席して

小川忠彦

「このような素晴らしい賞をいただき、洵に光栄に思います。一枚のポスターが平和をもたらすほど単純な世界情勢ではありませんが、一人のアーティストとして、平和運動の一助になるよう今後も制作に励みたいと思います。」公式の場での挨拶は苦手である。それが英語となれば、なおさらだ。一息ついて、ゆっくり続けた。「このポスターは、国籍や世代を越えて、平和の尊さや戦争の恐ろしさをわかりやすく訴えようとしたものです。そのために平和の象徴として鳩を、戦争の象徴としてミサイルをモチーフとしました。鳩がミサイルを小突き、倒すことが出来れば、平和が訪れるであろう。このような思いをミサイルの先端が揺れ動く様子と平和の虹色で表現しました。」たどたどしい私の挨拶が終ると大きな拍手が起った。5月31日、ニューヨークの国連本部ロビーで、第3回軍縮特別総会に呼応して行われた国連軍縮ポスター・デザイン・コンクールの授賞式のことである。

今回のコンクールは、国連の世界軍縮キャッシュペーンの一環として行われたもので、世界の国連加盟国に対して参加が呼びかけられた。これには2つの部門がある。1つは各国で行われる「国内予選」、もう1つは国際審査による「本選」である。我国も日本国際連合協会が主催し、外務省と国連広報センターの後援で3月中旬に「国内予選」が実施された。その結果、私の作品が「最優秀賞」に選ばれたわけだが、実は、前回の'82年のコンクールでも同様に選ばれていたのだ。しかし「本選」で入賞を逸し、残念な思いをしたことがある。従って、この時点では喜びも半分といった心境であった。それから約1ヵ月後、国連広報センターから「本選・最優秀賞」決定の知らせを受けた時は、半信半疑でお礼の言葉もそこそこに、大人気なく興奮した。

式の当日、国連本部のロビーに着いたのは11時頃だったろうか。団体の観光客や一般の見学者が行き交い賑わっていた。そのフロアの一部に、間仕切り風のパネルで展示場が特設されていた。正面に展示されているのは、私のオリジナル作品を基に国連が印刷した6種類のポスターだ。オリジナルと比べて、レイアウトと色がやや違う。地色の白が銀色に変わり重厚感を増している。そして「国連と軍縮——未来の平和のために」というキャッチフレーズが国連公用語（英語、ロシア語、フランス語、中国語、スペイン語、アラビア語）にそれぞれ訳され、画面の上部に挿入されている。サイズはA1とB1の中間で、少し縦長の変則形である。（欧米では珍しくないが…）これらの手前には表彰台やマイクが運び込まれ、式の準備がすっかり

整っている。その裏側に、私のオリジナル・ポスターと共に各国からの応募作品が展示されている。その数63ヶ国であった。

表現法はイラストレーション、写真、コラージュとまちまちだが、私の作品のようにシルクスクリーンを用いたものは無かったように思う。エアブラシや肉筆の迫力を感じさせる原画が殆どであった。モチーフは「鳩」「ミサイル」「地球」を何らかの形で使っているもののが多かった。戦争とのかかわり方は国によって異なるから、作者の意識も千差万別のはずだが、モチーフはよく似か寄っている。このことは、今回のコンクールが一切文字を使わないこと、という条件だっただけに、作者の多くが、周知のモチーフをピクトグラムとして用いた結果ともいえる。

12時30分、表彰式が始まった。既に式台を中心に半円形の人垣が出来ている。テレビ・スポットや写真のフラッシュで急に明るく華やいだ奮闘気に包まれた。フローリン国連総会議長から賞状と賞金を受け、分厚い大きな手で握手された時は、感激というより安堵を強く感じた。第2位はタイ、第3位は白ロシア共和国の方だった。国は違うが、同じ目的と手段でメッセージを送る同志だ。自然と親近感が募り「Congratulations！」と互いに握手を交した。

平和ポスターを制作する意図は「戦争を無くし、平和な世界を築くこと」にある。この命題が白けて感じるのは、何もポスターの効力が乏しいからではない。確かに、今日のテレビやラジオの衛星放送は、そのリアルタイムの迫力が臨場感を盛り上げ、我々を引きつける。特にコンピューターを駆使した映像・電波媒体の発展は目ざましいものがある。しかし、このような状況の中で、前述の命題に健気に挑んでいるのがポスターではないのか。一枚の紙面に情報を集約させながら、人間のぬくもりを感じさせるアート性は我々の感情をゆさぶる。100年以上の歴史をもつ、プリミティブで簡易なこの媒体は、見たところ静的でひ弱そうだが、意外と強かである。だからこそポスターは、世界の人達が一枚の紙に思いの丈をぶつけ、このようなコンクールにも自由に参加出来る格好の手段となっているのではなかろうか。

ポスターの内容や表現も大切だが、一人のアーティストとして平和を訴え続ける姿勢を今後も崩してはならない。そのような新たな思いが冒頭で述べた挨拶となつた。

拍手が小さくなり、式は終った。

1988年——私の平和ポスターが、国連の公式ポスターとして世界中に配布される。果たして、どれほどの働きをしてくれるのだろうか。大いに期待したい。

